

中世浄土宗における偽書——聖岡・聖聡著作を中心に——

鈴木 英之

一 はじめに

中世の学問を特徴付けるもののひとつに偽書がある。偽書（仮託文献）とは、作者を古の先徳や高僧、祖師などに擬した書物のことである。中世では、おびただしい数の偽書が作成され、それを有することで自らの正統を主張したり、ルーツを再確認したりするなどの重要な役割を果たしていた。現代の目から見れば、時に荒唐無稽な感がするものであっても、偽書は、中世において宗教的な真実として確固たる権威を有していたのである。

それゆえに程度の差こそあれ、どの宗派でも偽書を用い

る傾向にあつたが、あまり知られていないのが、中世浄土宗における、偽書の積極的な活用である。なかでも南北朝から室町期にかけて活躍した浄土宗第七祖・了誉聖岡と第八祖・西誉聖聡は、自らの教学を宗の根幹にすべく、偽書を拠り所として盛んに権威づけを行っていた。以下に聖岡・聖聡をとりまく偽書の仮託者と書名を掲げる。

【作者名】

【書名】

- ・菩提流支 ……『麒麟聖財立宗論』
- ・法然（源空） ……『建曆法語』『浄土布薩式』『弥陀本願義疏』『金剛宝戒章』『往生記』
- ・聖覚 ……『四十八願釈』
- ・聖徳太子 ……『説法明眼論』

印度の高僧・菩提流支、宗祖・法然、法然の高弟・聖覚、日本の仏法興隆の祖・聖徳太子といった、浄土宗に縁の深い人物を作者に配していることがわかる。仮託文献ということもあり、成立年、作者、製作の背景などいずれも判然としないが、上記すべてが版本などの形で現存していることから、浄土宗では、偽書が権威あるものとして受け入れられ、ながらく継承されていたことがうかがえる。^①

聖岡の偽書使用の理由について、服部英淳氏は、浄土宗には三国伝燈の系譜がない、伝統がない、として禅僧を中心とした諸宗から批判されるのに対し、偽書を利用して先祖師の名を借りることで浄土宗義の地位を確立しようとする念願したものと推察している。^②

もともと浄土宗は、法然が比叡山黒谷の経藏で、善導の『観無量寿経疏』を見出し、本願念仏に帰入した時に始まったとされるため、中国や印度に直接つながるような法脈を有していなかった。それゆえ浄土宗は、従来の仏教宗派に比して、歴史や伝統といった面がどうしても弱くなり、他宗から批判されつづけていた。聖岡は、こうした状況を憂慮し、祖師に仮託された偽書を用いて自宗の正統性を示し、教学や伝法制度を新たに確立したうえで、一宗としての統一をはかり、他宗の批判に対抗したものと考えられるのである。

この後、聖岡教学は、聖岡の属した鎮西流白旗派が宗内の主流になるにしたがって、宗の中心的な教学となり、近世の檀林教育では聖岡教学を枠組みとしたカリキュラムが組まれるほどの強い影響力を誇るに至った。だが聖岡教学は徐々に批判の対象となっていく。聖岡教学を権威づけた諸書が偽書であることが、出版文化を背景とした本文研究の昂まりによって明らかにされ、問題視されたためである。聖岡教学の権威は徐々に低下し、近世末期には善導・法然ら二祖三代の教学へと宗学の主流が移り、現在へと至っている。それゆえ浄土宗における偽書の研究は、先述の服部氏など、一部の先駆的な研究を除けばほとんどなされていない。しかし、ここで切り捨てられた偽書といったものが、中世の学問を形成する中心的な要素だったのであり、等閑視する訳にはいかない。^③

そこで小稿では、聖岡と、弟子の聖聡まで視点を広げ、両者の著作検討から、偽書が聖岡教学の定着に際していかに機能していたのか、また師弟間における偽書の継承と発展はいかなるものだったのか考察し、その意義について論じていきたい。^④

二、聖問教学と偽書

浄土宗第七祖・了譽聖問（二三四一〜一四二〇）は、新たな教学を創出し、伝法制度を整備して、浄土宗の独立教団化の基礎を作り上げたことから、浄土宗中興の祖と讃え称されている学僧である。⁵⁾

聖問は、教学を形成するにあたり、数多くの偽書を用いたが、そのほとんどが聖問教学の根本となる「二蔵三法輪」の正統性を証明するために用いられている。

「二蔵三法輪」とは、浄土宗の優位性を内外に示すための教説で、聖問の全く新しい教相判釈説のことをいう。⁶⁾ 教相判釈説とは、諸宗派が旨とする教理の特色をそれぞれ挙げ、比較・判定を行うことで、自宗の教理の優位性を論証する説のことである。天台宗なら五時八教、華嚴宗なら五教十宗というように、各宗独自の教相判釈説を持ち、それぞれ重要な教説として位置付けられていた。

二蔵三法輪と偽書との関係が初めて説かれたのが、永徳二年（一三三二）に成立した聖問の浄土教学書『浄土略名目図』である。本書は、法然の説を、弟子の聖覚が筆記し、それを聖問が図示したとの体裁をとる書物である。勿論仮託であり、実際には聖問が一人であらわしたものと考えて

よい。本書と偽書との関係については、既に服部英淳氏、望月信亨氏らによる詳細な研究があるが、後の論にも関係するため、いくつか気づいた点を加えながら概要を確認していきたい。

次に掲げたのは『浄土略名目図』の序文の一部である。これは、いわゆる「建曆法語」と呼ばれる箇所⁷⁾で、建暦元年（一一二一）八月に行われた法然の講説とされる。⁸⁾ ここで注目すべきは、聖問の新たな教学である二蔵三法輪は、もともと中国浄土教の大家・善導が説いた教えであり、それをもとに法然が講説した、とされていることである。

方今我高祖源空上人^云大和尚、建暦元年^{辛未}八月上旬^示衆曰、若於^レ浄土宗^ニ有^レ修学志^人、於^レ諸師中^ニ選^レ須^ス歸^ス三師^ノ積義^云。其三師者、一、北齊大巖玄奘曇鸞玄閑大和尚、二、唐朝西河道綽禪師大和尚、三、唐朝終南悟真光明善導大師^ノ淨業大和尚^ニ是也。^{（中略）}第一若依^レ北齋積義^ニ、以^レ難易二道^ニ可^レ為^レ教相^云。第二若依^レ西河積義^ニ、以^レ聖淨二門^ニ、應^レ為^レ教相^云。第三若依^レ光明大師積義^ニ、立^レ浄土宗人^ニ、應^レ以^レ二蔵二教^ニ而攝^中一代^ノ聖教^云。⁹⁾

法然（高祖源空）が、人々に述べたことには、浄土宗において修学の志をもつ人は、諸師の中から選択して「三師ノ積義」に帰依しなければならないという。「三師」とは、

曇鸞・道綽・善導（光明大師）という中国浄土教の三大祖師のことを指す。興味深いのが、第三番目に挙げられた善導の釈義が「二蔵二教」すなわち二蔵三法輪とされていることである。つまり二蔵三法輪は、聖問ではなく、もともと善導が創案したものだといふのである。善導は、法然が「偏依善導」と述べたように、絶対的に帰依し、尊崇していた人物である。

これだけではない。聖問は自説のルーツをさらに印度にまで遡らせる。聖問は『二蔵義見聞』（一三九二年成立）で、何況建曆年中法語是聖覺法印筆受也。（中略）其上聖覺只其筆受者也。正是高祖御法語也。高祖亦非私言。一既云三蔵云。即彼聖財論中其目分明也。不及疑難者也云¹⁰。

と、法然の「建曆法語」は、法然の「私言」（自説）ではなく、『麒麟聖財論』に依拠していると主張する。『麒麟聖財論』（『麒麟聖財立宗論』）とは、印度の高僧・菩提流支に仮託された偽書で、二蔵三法輪に関する記述をもつことで知られる。

聖問は、法然仮託の「建曆法語」にもとづき、新しい教義である二蔵三法輪が、自らの創案ではなく、善導・法然を経て、自身に伝えられた教説であると主張した。これに加えて「建曆法語」は、菩提流支仮託の偽書『麒麟聖財立

宗論』に依拠していると主張することで、自身の教義を、印度の菩提流支から中国の善導、日本の法然・聖覺を経由して、脈々と受け継がれた三国伝来の正統な教学として位置付けたのである。

聖問の偽書使用の理由として、先行研究では、浄土宗には伝統がないとの他宗からの批判に対し、偽書を経由して印度・中国の祖師と法然、さらには自身とをつなげることで、不足している伝統や正統を補うため、という主に対外的な要因が挙げられていた。

だが、二蔵三法輪をめぐる諸書の議論を詳細に追っていくと、先行研究でいう対外的な側面もさることながら、聖問教学に疑義を持つ、宗内の懐疑派に向けた議論という側面が強いことに気づく。例えば、先に見た『二蔵義見聞』では、末尾に「疑難二及バザル者也¹¹」とあるように、二蔵三法輪の根拠となる「建曆年中ノ法語」を疑ったり非難したりしてはならないと戒めていた。この発言は、聖問の新教学である二蔵三法輪の信憑性（正統性）に疑問を持つ人がかなり早い段階から存在していたことを意味している。

これが宗の内部からあがった疑義であることは、聖問の高弟・聖聡が『大経直談要註記』（一四三三年成立）で、爾有問弟等云、二蔵名目者問公之私名目也¹²と、門弟の中には「二蔵名目」（二蔵三法輪）は聖問が私に

作つたものだ」と疑う者がいた、と述べていることから裏付けられる。また別の箇所では、

今二蔵名目者雖三論名目、宗祖後魏菩提流支三蔵作麒麟聖財論四卷講浄土門之時、以此二蔵三法輪名目為教相。鸞師受三蔵、綽公受鸞師也。光明受三蔵公師。代代相伝無異途名目也。爰以上人建曆元年八月上旬之比示衆云、立浄土名目之時、以三蔵二教為宗教相。既是光明受伝、吉水成敗也。浴門流一人、誰背斯耶。

と、二蔵三法輪が、菩提流支から曇鸞、曇鸞から道綽、道綽から善導（光明）へと代々相伝された「名目」であり、さらには法然（吉水）が、善導から伝授されて裁断したものなのだから、浄土の「門流」に属する人々はどうしてそれに背くことがあるのかと、やはり宗内の人々に対して聖岡教学の正統性を主張し、それを宗のスタンダードにすべく活動していた。

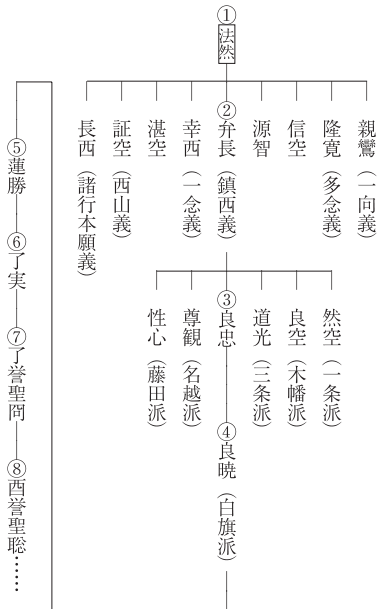
こうした事例から考えれば、聖岡が、偽書にもとづき自らの教学の正統を示した意図は、対外的というよりも、むしろ浄土宗内部の僧侶たちの、新教学に対する疑念を晴らす方に重点が置かれていたものと考えられる。

聖岡・聖聡らが、宗内の疑義を晴らすことに注力した理由は、当時の浄土宗内の正統をめぐる争いにある。法然は

非常に門弟が多く、法然の没後、それぞれが正統な後継を主張して様々な教義をとなえていた（参考）系図参照。また、第三祖良忠の門弟も諸派に別れ、それぞれがやはり良忠の後継を主張し、諸派林立していた。それゆえに浄土宗では、他宗の批判に答えるという対外的な活動はもちろん、宗内でいかに多数派となり、自流の教学を浸透させ、正統な後継者としての地位に収まるかということが重要な課題となっていた。

聖岡が新教学をうち立て、それ以前にはほとんど知られていなかった偽書を用いて自らの教学の保証としたのも、

【参考】浄土宗諸派略系図 ①〜⑧は浄土宗祖師（鎮西流白旗派）の順を不す



新たな教学を示し、新たな正統を宗の内外に示すことで、様々なしがらみから離れて、諸派を、自らの属する白旗派のもとに一つにまとめようとする意図があったのだと考えられるのである。

三、西誉聖聡と偽書

浄土宗第八祖・西誉聖聡（二三六六一—四四〇）は、芝増上寺の開山として知られる碩学で、師・聖岡の活動を引き継いで新教学を推進し、浄土宗の教団整備に努めた。聖聡も数多くの偽書を用いたが、なかでも重要なのが『弥陀本願義疏』である。

『弥陀本願義疏』は、『無量寿経』で説かれる阿弥陀仏の四十八願に対する注釈書で、作者を法然に仮託した偽書である。こちらも成立年・作者ともに明らかにし難いが、聖聡著作に集中して引用が認められることから、十五世紀初頭には存在していたようだ。本書は、聖岡の新教学である二蔵三法輪に関する記述を持つことに特色があり、聖聡はこれを多用して、二蔵三法輪の正統を繰り返し主張している。

次に掲げたのは、聖聡の主著のひとつで、永享五年（一四三三）成立の『大経直談要註記』である。聖聡はここで

『弥陀本願義疏』の跋文を引用することで、聖岡以上に、積極的に二蔵三法輪を宣揚していく。なお、便宜上①～③に段落分けしたが、本来ひとつづきのものである。

①爰以高祖亦講此四十八願之時積曰、(中略)仍焚三沈水香於三尊前請加備於三尊願當夜有二高僧現于夢枕告言予是沙門善導也。因汝信心深重今來命汝。自今已後階定名義教相。應以二蔵三輪定中判淨土宗。更以余相承戒儀可授有心之道俗。敢勿依先來教相云。

②爰愚身夢寤後、異香韻於草菴。聖容若存于時。悲喜滿內心。落泪隣外儀。自爾已來、閣難易聖浄之名目。就二蔵三輪之教相焉。今此義疏者即非余愚作。是京師大師之伝説也。賢者一見之後敢勿令他見矣。于時建曆未二月八日已上。此御相承建曆元年二月八日也。

③同年八月上旬之比示衆曰、若於浄土宗有修学志人於諸師中選須歸三師義。第三若依光明大師釈義立浄土宗人、應以二蔵及与二教撰一代諸聖教云。高祖

このうち、①②は『弥陀本願義疏』からの引用、③は先に見た「建曆法語」からの抄出となる。

まず①では、「高祖」(法然)が、香を焚いて阿弥陀三

尊に祈っていると、一人の高僧が「夢枕」に現れて、自分は「沙門善導」であると告げ、これからは「二蔵三輪」（二蔵三法輪）に従って教相判釈を行い、浄土宗を位置付けるべきであり、以前から存在している「先來ノ教相」に依拠してはならないと告げたという。「先來ノ教相」とは、中国の浄土教家である曇鸞・道綽の伝統的な教相判釈説（難易・道、聖浄二門）のことをいう。

その後、目を覚ました法然は、②善導の夢のお告げに従って、曇鸞・道綽の教説ではなく、「二蔵三法輪」の教相判釈説に依拠するようになった、だから二蔵三法輪を説く『弥陀本願義疏』は、法然自身の著作ではなく、善導（「京師大師」）が伝えた説なのだ⁽¹⁶⁾という。これを受けて、法然は同年の八月に③「建曆法語」の講説に至ったとされる。

本話が、善導と法然との夢中対面（二祖対面）のエピソードに基づいていることは言うまでもない。浄土宗では、半金色の善導と対面したという法然の夢をもって、十二世紀の日本に生きた法然と、七世紀の中国で活躍した善導との間に直接的な面授があった証明とする。夢中対面の時期は、諸説あるが、通常は立教開宗のころ、もしくはは建久七、八年（一一九七、九八）ごろとされる。『弥陀本願義疏』における夢中対面は、建曆元年（一一二

一）の出来事とされるから、従来の中対面よりも後、晩年になってから受けた新たな夢告だったことがわかる。

しかし、ここでは単なる対面にとどまらない。二蔵三法輪を用いなければならず、選択すべき教理を具体的に指示するなど、夢告の内容が大きく改変されているのである。先述の「建曆法語」では、曇鸞・道綽・善導ら三祖師の教説をそれぞれ提示しており、一応は選択の余地が残されていた。だが、『弥陀本願義疏』では、曇鸞・道綽の教相を廃して、善導の二蔵三法輪に従うべきだと、聖問の新教学をより積極的に推し進めていることがわかる。ここからは、聖問教学の宗内標準化を目指す明確な意図と同時に、聖聡の聖問教学宣揚に対する強固な姿勢を感じ取ることができる⁽¹⁸⁾。

事実、聖聡は『弥陀本願義疏』にもとづき、自著で繰り返しその正統を主張していた。たとえば『浄土二蔵綱維義』では、

私勘文、有三証故必立三法輪。一者宗祖三蔵聖財論中、(中略)二者高祖上人本願義疏云、(中略)三者上人既於夢定中受大師重誨。(中略)上来三証、或宗祖三蔵玉章、或高祖上人書籍、仰信。入真宗談林浴吉水正流之人何可不靡化風。誰亦彼不嘗神味一乎。何況光明指授全是弥陀宣言・積尊金口也。上人亦

勢至菩薩^ノ足跡也。光明^ニ直接^ニ吉水^ニ。弥陀^ニ全授^ニ勢至^ニ。吉水^ニ末流^ニ悉是^ニ勢至^ニ遺弟^ニ也。直^ニ仰信^ニ仰信^ニ。此時^ニ最可^ニ立^ニ三法輪^ニ云^ニ已^ニ上^ニ。

と、二蔵三法輪の立教には三つの証明があるという。それは『麒麟聖財立宗論』、『弥陀本願義疏』、『善導と法然の夢中対面』の三つを指し、この三証があるのだから、「吉水ノ正流」(法然門下の正流)にいる人は新教学の「化風」に靡かないことがあるうか、直ちに仰ぎ信じ、「此時」(現在)は二蔵三法輪を最も立てなければならぬと、聖岡教学への帰依を強く主張していた。『浄土二蔵綱維義』は、聖岡の死後、約二十年ほど経った時(一四三八)の著作だが、依然として聖岡教学に対する宗内の疑義があり、聖聡もその対処に苦慮していた様子がうかがえる。

このように聖聡は、法然仮託の偽書『弥陀本願義疏』を用いることで、善導・法然の名のもとに、従来の教説ではなく、新教学Ⅱ二蔵三法輪を積極的に宗内で推進していた。それは偽書と夢という極めて中世的な手法にもとづき、自らが旨とする教学の正統性を、内外に知らしめるための営みだったということができるのである。

四、説話化される聖岡

『弥陀本願義疏』をめぐるエピソードのうち、最も興味深いのが、聖聡『大経直談要註記』に見られる次の記述である。これらは、先掲した『大経直談要註記』の③につながるもので、聖岡と偽書との出会いが描かれている。

然^ニ先師^{上^レ著^ニ}見^ニ建曆元年八月月上旬名目^ニ偏就^レ彼作^ニ二蔵略名目並頌義^ヲ偏興^ニ行玉^ニ二蔵^ノ教相^ヲ然^ニ始^レ不^レ見^ニ麒麟聖財論^ニ之時^ニ建曆名目宗祖^ニ三蔵^ノ日書^ヲ給^ニ未^レ見^ニ本文^ニ云^ニ後得^ニ聖財論^ヲ即治^ニ定^ニ給^ニ弥^ニ以^ニ二蔵^ノ名目^ニ依^ニ代代御相^ニ伝^ニ爾^ニ悲喜^ノ之御^ニ泪余^ニ袖^ニ給^ニ也^ニ其上^ニ猶^レ見^ニ義疏^ノ相^ニ伝^ニ爾^ニ悲喜^ノ之御^ニ泪余^ニ袖^ニ給^ニ也^ニ今^ニ思^ニ之^ニ亦^ニ愚^ニ袖^ニ不^レ乾^ニ爰^ニ知^ニ先師^ノ大権^ニ云^ニ云^ニ。

「了^レ誉上人」(聖岡)は、法然の「建曆法語」を見て、ひたすらそれに従って著作をあらわし、一途に「二蔵ノ教相」を興行した。ところが聖岡は、「建曆法語」に引用されている「宗祖三蔵ニ曰ク」という発言の典拠となる書物を見ていかなかったため、どうにも確信が持てなかった。しかし、後に典拠となる『麒麟聖財立宗論』を入手・閲覧したことによって、二蔵三法輪が、宗祖三蔵(善提流支)以來つづく、代々の相伝であること、さらに善導がそれを決

定したことを確信し「落泪」したという。それに加えて『弥陀本願義疏』の相伝を見知って、ああ自分は正しかったのだと悲喜する余り、聖阿は涙で袖を濡らした。今それを思い出すと、私（聖聡）も涙を流してしまおうという。

二藏三法輪の根拠となる偽書類を手に入れた際の聖阿の反応と、それを見た聖聡の思いを記したものである。追いつめていた書を実見した時の感激の様子がわかり、とても興味深いものだが、ここには大きな問題がある。

じつは、聖阿は『弥陀本願義疏』を見ていなかった可能性があるのである。

『弥陀本願義疏』は、これまで聖阿の使用した最も代表的な偽書のひとつと考えられてきた。聖阿教学における偽書について批判した近世の学僧・成誉大玄（一六八〇～一七五六）も『弥陀本願義疏』の名をたびたび挙げ、その真偽について論じていた。⁽²¹⁾しかし、改めて用例を探してみると、管見の限り、聖阿著作には『弥陀本願義疏』の引用は一例も認められない。

つまり、これほどまで『弥陀本願義疏』の価値が持ち上げられ、聖阿が涙を流したと劇的に語られているにも関わらず、実際には、聖阿は『弥陀本願義疏』を所持していなかった可能性が高いのである。とすれば、この一連の記述は、聖聡による『弥陀本願義疏』という新たな偽書を用い

た、師・聖阿の説話化だった可能性が浮かび上がってくる。偽書に依拠して自身の教学の正統を説いていた聖阿が、今度は、新たに加えられた偽書の正統を保証する存在として、聖聡によって説話の中に組み込まれているのである。

聖聡の『弥陀本願義疏』重視の姿勢は、他の書物からもうかがうことができる。『教相切紙拾遺徹』では

今亦私得^レ上人所述本願義疏。彼云、(中略)私云、(中略)加之彼文奥書云、此義疏者非^ニ余愚作^一。是京師大師之伝説也。賢者一見之後敢勿^レ令^ニ他見^一矣。已^レ仰可^レ信。本迹利益誠説之外誰加^ニ文義^一。此義亦先聞也。古^レ伝^ニ於^ニ二藏^一頌義^一今明^ニ於^ニ本願義疏^一而已。不^レ可^ニ聊爾^一談^レ之。⁽²²⁾

と、「私」に『弥陀本願義疏』を手に入れた聖聡は、「古」は「二藏頌義」を伝えたが、「今」は「本願義疏」を明らかにするだけだという。「二藏頌義」とは、聖阿の主著のひとつ『釈淨土二藏義』のことで、「建曆法語」に依拠して二藏三法輪を説く重要な教学書である。だが聖聡によれば、今は「二藏頌義」よりも『弥陀本願義疏』に重きを移した、というのである。

なお『弥陀本願義疏』の用例は、ほとんどが聖聡著作に集中し、同時代のそれ以外の人々の著作には、管見の限り引用は認められない。⁽²³⁾また『弥陀本願義疏』を十三箇所

引用する聖覚仮託の偽書『四十八願釈』の初出も聖聡であることが指摘されている。⁽²⁴⁾ それゆえ『弥陀本願義疏』の成立について、聖聡が何らかの形で関与した可能性が高い。いずれにせよ、聖聡が、聖岡教学の正統を示すための根拠として、『弥陀本願義疏』を表舞台に持ち出したことは間違いないだろう。

このように聖聡は、『弥陀本願義疏』という新たな偽書を用いて、より積極的に聖岡教学の宣揚をはかった。それは師・聖岡の言行をも説話化し、新たな正統の一部としていく宮みだつたということができるのである。

五、近世浄土宗における偽書

浄土宗における偽書の問題は、中世だけではなく、近世の問題でもある。ここからは、檀林教育を例に、近世浄土宗における偽書の位置付けについて簡単に見ていきたい。

近世の浄土宗では、檀林教育という教育制度がとられ、一定のカリキュラムにもとづいて浄土教育が行われた。初学者たちは十五歳以上になると檀林という教育機関に入り、最初の六年間で聖岡教学(名目部・頌義部)を学び、その上で法然・善導著作の修学を学んだ。つまり、近世においては、聖岡教学が宗学の枠組みとして機能していたのである。⁽²⁵⁾

だが冒頭でも述べたように、近世も時代が進むにつれて、聖岡教学における「偽」の要素は批判の対象となっていた。

たとえば浄土宗名越派の檀王法林寺四世・東暉(二六二三〜八二)は、偽書のひとつ『麒麟聖財立宗論』を版行した際に付した跋文の中で、

今此論者、浄家之命脈、華文深理、不可得而称矣。爾有人不窮素意、妄曰偽論世不賞。故吾師袋中作私釈粗註明之。雖然略釈而新学不能通達。至若近來所版行本末甚符與某悲此書廢。或時聚初機弟子暫講之。隨己分改以重鏤梓志在弘通耳。

と、本書(『麒麟聖財立宗論』)の「素意」を知ろうとせず、妄りに「偽論」であるとして評価しない人がいると述べていた。東暉本は延宝四年(二六七六)の刊行だから、十七世紀中頃には既に、聖岡を取り巻く偽書の信憑性が揺らいでいたことがわかる。⁽²⁶⁾

また十八世紀になると、知恩院四十五世・成誉大玄(二六八〇〜一七五六)は、

一、建語者、問。建曆法語為真為偽。答。真偽難決。然可疑者有七。(中略)上来以七箇疑難驗建語之文、稱之真語、而其可耶。一、麒麟者、問。麒

麟聖財論ハシ為レ真トヤ為レ偽トヤ。答。是偽ニヤ非真ハ。(中略)二、願疏者、問。本願義疏ハシ為レ真トヤ為レ偽トヤ。答。此亦偽造ナリ。何者此書始終違ス光明及選択授手印等ニ。又託ニ偽夢ニ。廢ニ鸞綽等教相ニ弘ニ自所立教相ニ。一 無レ所取ル。

と、「建曆法語」「弥陀本願義疏」「麒麟聖財立宗論」などの仮託書類を偽書と断定し、善導・法然ら祖師の著作と相違していると論じた。特に『弥陀本願義疏』は、「偽夢」によってその信憑性を高め、自らの教学を広めようとしたものであるから「一ツトシテ取ル所無シ」と強く批判していた。

ところがその一方で、大玄は、檀林での修学法法を述べる中で、聖問の『浄土略名目図』の修学を初学者に勧めていた。

鼻祖円光大師〔法然〕、昔シ建曆歳中、摂州勝尾寺ニ在シ、浄土名目ヲ作り玉フ。安居院ノ聖覚法印等記シオカレケルヲ、了誉上人図ヲ作り、又見聞二卷ヲ撰テ註釈シ玉ヘリ。子細ニ読テ一覽スベシ。此書ハ略註セル者ナレバ、委曲ハ意得難カルベシ。大較意得テ止ムベシ。十日バカリナルベシ。

先述のとおり、『浄土略名目図』は、法然の講説（「建曆法語」）を聖覚が筆記し、聖問が図示したものとされるが、大玄は「建曆法語」を法然の真説ではないと判断していた。

だがここでは「法然説・聖覚記・聖問図」という偽書に端を発する体裁を、そのまま提示して初学者に修学を勧めているのである。

このように大玄は、聖問絡みの偽書に対して、批判と推奨という明らかに矛盾するふたつの立場をとっていた。近世的な思考からすれば、偽書のような非合理的な要素は極力廃したい。だが、宗学の本心が聖問教学にある以上は無下に否定はできない。大玄は、宗学の本心となる聖問教学の権威のより所が、偽書や偽夢といった中世的な「偽」にあることに悩み、対応に苦慮していたと考えられるのである。

聖問教学は、近世に入って浄土宗の中心的な教学となつたが、その根幹にある「偽」の要素が問題となり、様々な議論が引き起こされた。偽書は決して中世だけのものではない。正統の根柢が偽書にある限り、それは依然として近世の浄土宗内にも存在しつづけていたのである。

六、おわりに

以上小稿では、中世浄土宗における偽書について、主に聖問・聖聡の著作を通じて考察を行った。

聖問は、新たな教学を示すにあたって偽書を多用し、正統を主張した。だが当初から門弟の疑義が見られたことか

ら類推できるように、それは対外的というよりも、むしろ、宗内の懐疑派を対象とした議論だった。⁽³¹⁾ 聖岡は、偽書を用いて、善導・法然から相伝された教説だと繰り返し主張すること、自らの新教学の正統性や權威を高め、門弟の疑義を取り除き、諸派林立していた浄土宗諸派をまとめようとしていたのである。

聖岡の後を引き継いだ聖聡は、法然仮託の偽書『弥陀本願義疏』に着目し、善導・法然の名の下に聖岡教学(二藏三法輪)に従うよう指示するなど、より積極的にその正統性を主張した。『弥陀本願義疏』は、これまで聖岡が使用した代表的な偽書として捉えられていたが、本書の用例は聖聡著作に集中しており、管見の限り、聖岡著作に引用は認められない。それゆえに、聖岡の後を受け継いだ聖聡が『弥陀本願義疏』を用いて、師僧の言行をも説話化することで、二藏三法輪の信憑性を高めるべく聖岡以上に積極的に活動していたことが明らかになる。聖岡教学が、近世後期に至るまでの長い間浄土宗の中心的な教学となった背景には、偽書を用いた、聖聡の活発な宣揚活動によるところが、かなり大きかったと考えられるのである。

とはいえ、聖岡・聖聡以降、聖岡教学が具体的にどのように入受容され、近世浄土教の中心になっていったのか、現時点では把握しきれていない。単に聖岡・聖聡の属した鎮

西流白旗派の伸長に伴い流布しただけなのか、聖聡の開山した増上寺の意向によるのか、それともまた別の理由があるのか、判然としないのである。これを明らかにするには、浄土宗教団史や、書籍の版行状況など、中世・近世双方を視野に入れた多面的な調査・考察が必要になるだろう。浄土宗における偽書の問題は、中近世の教団形成の解明にもつながる、大きな広がりを持っているのである。

注

- (1) 上記のうち『往生記』『四十八願釈』は真偽が決していない。筆者は、中世浄土宗の偽書に関する研究を行い、これまでに『麒麟聖財立宗論』『弥陀本願義疏』の翻刻・解題を発表している。拙稿「菩提流支三藏所造『麒麟聖財立宗論』解題・翻刻―中世浄土宗における仮託文献について―」『論叢 アジアの文化と思想』二〇、二〇一・一・十二、二〇一・二・十二 参照。

- (2) 服部英淳「了誉聖岡の教学体系に関する述作解説」『浄土宗全書』十二所収。一〇―一一頁 参照。

- (3) 偽書は、九〇年代後半から、主に文学研究者によって注目され、『日本古典偽書叢刊』全三巻(現代思潮新社、二〇〇四―五)が刊行されるなど、飛躍的に研究が進んだ。思想史からの研究としては、佐藤弘夫『偽書の精神史』

(講談社選書メチエ、二〇〇二) などがある。小稿もこうした偽書研究の昂まりを受けている。

(4) 聖岡・聖聡は、偽書の真偽についてどのように考えていたのか、成立や入経路が未解明のこともあり、現時点では判断し難い。なお当然のことながら、聖岡・聖聡が「偽書」という用語を使用したことはない。

(5) 聖岡の概要、中世の学問との関係については、拙著『中世学僧と神道―了譽聖岡の学問と思想―』（勉誠出版、二〇一三）参照。

(6) 二蔵二教判、二蔵二教二頓判とも呼ばれる。小稿では二蔵三法輪で統一した。

(7) 服部英淳注(2)前掲論文、望月信亨「岡師の学風と其の由漸」「聖岡上人の事績及び其の教義」(同『浄土教之研究』金尾文淵堂、一九二二)参照。

(8) 『浄土略名目図』は、法然の講説を聖覚が筆記し、聖岡が図示したものとされる。したがって『浄土略名目図』全体が「建暦法語」そのものといえるのだが、実際には、この序文が独立して「建暦法語」として諸書に引用される場合がほとんどである。建暦元年は、法然遷化の前年にあたり、「建暦法語」は、法然最晩年の講説との体裁をとっていることがわかる。

(9) 聖岡『浄土略名目図』序文(浄全十二、六五八頁上)参照。

(10) 聖岡『二蔵義見聞』巻第四「第七卷之處 初分教義」(浄全十二、四二八頁下)参照。

(11) 聖岡『二蔵義見聞』巻第四「第七卷之處 初分教義」(浄全十二、四二八頁下)参照。

(12) 聖聡『大経直談要註記』(浄全十三、四〇頁下)参照。

(13) 聖聡『大経直談要註記』(浄全十三、四〇頁上)参照。

(14) 『弥陀本願義疏』については、注(1)前掲拙稿「沙門源空記『弥陀本願義疏』解題・翻刻」、徳澤龍泉「弥陀本願義疏」と「弥陀本願義」とについて(『龍谷学報』三〇九、一九三四・六)参照。

(15) 聖聡『大経直談要註記』(浄全十三、四〇頁上下)参照。

(16) 『弥陀本願義疏』によれば、善導との夢中対面がなされたのは建暦元年の二月八日とされるから、法然が善導のお告げによって従来の教説を捨てて二蔵三法輪に目覚め、それにもとづき、同じ年の八月に「建暦法語」を行ったという構成になっていることがわかる。

(17) 「夢感聖相記」(了慧道光集録『拾遺黒谷上人語燈録』。浄全九、四五五頁)、『法然上人行状絵図』第七(知恩院本『法然上人絵伝(上)』、岩波文庫、六七頁)など参照。夢中対面の評価については、田村圓澄「法然伝の諸問題」(同『日本仏教史』別巻・第三部、法蔵館、一九八三)、中村生雄「法然のヴィジョン」(同『カミとヒトの精神史―日本

仏教の精神構造― 人文書院、一九八八）など参照。

(18) 浄土宗では、夢が重視され、自身の教学の正統性の裏付けとされることが多々あった。今は亡き祖師と自らをつなぎ、その正統性の保証となるという夢の機能は、偽書と共通する点も多く、中世における夢と偽書の関係は今後追究すべき課題であろう。中世の浄土宗の夢についての概略は、玉山成元「中世浄土宗教団と夢」（『日本仏教史学』一六、一九八一・二）が参考になる。

(19) 聖聡『浄土二藏綱維義』（浄全十二、五七五頁上）参照。

(20) 聖聡『大経直談要註記』巻三（浄全十三、四〇頁下）参照。

(21) 成誉大玄『浄土頌義探玄鈔』巻中「十論疏真偽者、此中有^{ユリ}四。一^ニ建語、二^ニ麒麟、三^ニ願疏、四^ニ布式」（浄全十二、六一一頁下）参照。

(22) 聖聡『教相切紙拾遺徹』下二「陀」（浄全七、一七三頁上下）参照。

(23) 聖岡『伝通記糅鈔』（浄全三、二七八頁下）と、名越派の良栄（？―一四三三）『往生礼讚私見聞』（浄全四、六八五頁上）に「本願義疏」の名が見えるが、『弥陀本願義疏』に同文は見られず、どちらも同名異書のことを指していると考えられる。

(24) 上野麻美「聖聡の談義における聖覚『四十八願釈』享

受―『大経直談要註記』を中心に―」（『国語国文』七〇―九、二〇〇一・九）参照。なお、鎮西流の僧・昌誉（一六三五没）が書写した元録版『四十八願釈』（原本未見）には、弥陀本願義疏の引用がない一本があったとの注記も見られることから、聖聡の関与の度合いや、聖覚筆の真偽も含めて今後の詳細な検討が必要だろう。龍口恭子「聖覚『四十八願釈』の検討」（『印度学仏教学研究』五二―一、二〇〇三・十二）参照。

(25) 成誉大玄『蓮門学則』「予按ズルニ、古来ハ八部（九六）ノ次第二依テ、学則ノ立タル可成。故ニ初学ト云三年。名目部ト云。次三年ヲ頌義部トシ、次三年ヲ選択部トシ、次三年ヲ小玄義部トシ、次ヲ大玄義トシ、次ヲ文句部トシ、次ヲ礼讚部トシ、次ヲ論部トシ、次ヲ無部トス」（大正八十三、三二〇頁上）参照。「名目部」では『浄土略名目図』『浄土略名目図見聞』を、「頌部」では『二藏二教略頌』『釈浄土二藏義』を学ぶ。これらはみな聖岡教学の根幹をなす教学書として知られる。

(26) 注（一）前掲拙稿「菩提流支三藏所造『麒麟聖財立宗論』解題・翻刻」（二三〇頁）参照。東暉の発言の背景には、名越派の学僧・袋中良定（一五五二―一六三九）の存在がある。袋中は、鎮西流名越派の中興の祖と称される碩学で、聖岡教学を修める中で、偽書（『説法明眼論』『麒麟聖財立宗論』）の研究も行っていた。東暉は、自らが住す

る檀王法林寺の住侶だった袋中教学の復興に努め、袋中の著作を版行する過程で、その原典となる偽書の版行も盛んに行っていた。東暉は、偽書の評価が低下するとともに、袋中の偽書研究の成果が忘れ去られることを怖れたのである。袋中と偽書との関係については、拙稿『麒麟聖財立宗論』解題・翻刻、同『袋中良定述』『麒麟論私釈』解題・翻刻（『論叢アジアの文化と思想』二二、二〇一三・一二）など参照。

(27) 成誉大玄『浄土頌義探玄鈔』巻中（浄全十二、六一一頁下、六一三頁上、六一五頁下）参照。大玄の教学については、服部英淳注（2）前掲論文、東海林良昌「随自願宗・随他扶宗について―大玄『浄土頌義探玄鈔』を中心に―」（『佛教大学総合研究所紀要』一六、二〇〇九・三）が参考になる。

(28) 大玄の見解は、後世の聖岡観に影響を与え、聖岡教学中心の宗学から二祖三代への回帰へと変化する大きなきっかけとなった。ただし後述するように、大玄は聖岡の偽書利用については批判していたが、その学識についてはむしろ褒めたたえていたことに注意が必要である。

(29) 成誉大玄『蓮門学則』「而後当看名目図見聞」（大正八三、三三三頁中）参照。

(30) 大玄は、聖岡が多用した偽書や偽夢といった中世的な要素は批判する一方で、聖岡の学識の高さについては高く

評価していた。大玄『浄土頌義探玄鈔』によれば、偽書を使っているからといって聖岡を批判するのは誤りだと断じ、聖岡はきちんと善導・法然両祖師の教門を理解した上で「随他之説」（偽書を含めた教説）を使用したのであり、それは「戦国」の世においては、浄土宗の地位向上のためにやむをえないことだったのだと聖岡の行動に一定の理解を示していた。

(31) 東暉が『麒麟聖財論』を「偽論」であるとして評価しない人がいると述べていたことを先述したが、聖岡・聖聡の頃に既に疑義が出されていたことを考えると、聖岡教学のに対する疑いは中世から近世に至るまで常に存在しつづけていた可能性がある。今後は、聖岡教学を異端視していた人々の検討も課題となるだろう。

（早稲田大学非常勤講師）